

氏名	何 暁麗
学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第4183号
学位授与の日付	平成22年 3月25日
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第4条第1項該当)
学位論文題目	唐話資料に反映する江戸時代における中国語受容の諸相
学位論文審査委員	主査・教授 江口 泰生 教授 辻 星児 准教授 京 健治 准教授 山本 秀樹

学位論文内容の要旨

本論文は江戸時代において中国語がどのように受容されていたか、特に洒落本『和唐珍解』中の唐音、「訳官系唐音」資料、冠山関係資料を中心に、音韻・語彙・表記に基づいて明らかにしたものである。

論文は公刊論文2本と新たに未公刊論文1本分(第二章)を中心に、A4版200枚(附録を除いた部分を原稿用紙に換算すると720枚)におよぶ大部なものである。

序章

第一章 冠山の唐話資料における一般社会への浸透 —洒落本『和唐珍解』中の唐音を通して—

第一節 本章の研究対象

第二節 洒落本『和唐珍解』

第三節 声母

第四節 韻母

第五節 声母・韻母に残された問題点について

第六節 江戸時代における文学作品中の唐音

第二章 唐話資料における語彙の性格 —写本資料『唐話類纂』と刊本資料『唐話纂要』の比較を通して—

第一節 はじめに

第二節 本章の考察対象

第三節 両資料における語彙の比較

第四節 両資料における共通語彙の語順について

第五節 両資料における引用・被引用関係

第六節 両資料における非共通語彙について

第七節 両資料における語彙の唐音転写と日本語訳

第八節 結論

第三章 唐話資料における句読法 —冠山の唐話資料を中心に—

第一節 はじめに

第二節 仏典・漢籍資料における句読点

第三節 冠山の唐話資料における句読法

第四節 結論

終章

- 第一節 本論文のまとめ
- 第二節 結論
- 第三節 今後の課題と展望

参考文献／附録資料

序章では研究対象を概略的に説明し、唐音に関する従来の研究と諸研究に用いられた唐音資料を紹介し、本論文の目的及び構成を示した。

第一章では洒落本『和唐珍解』中の唐音を中古漢字音の枠組みに投影し、声母と韻母で分類し、原則的な音形、原則から外れる音形を抽出し、それらの意味を追究した。

第二章では、冠山が関与する写本資料『唐話類纂』と刊本資料『唐話纂要』の比較を通じて、両資料における語彙の性格及び両資料の関係を考察した。その結果、写本資料が刊本資料から唐話を転写・選択的に引用したことを判明し、また、写本資料と刊本資料の所収語彙に俗と規範の差があることを解明した。

第三章では、冠山の唐話辞書を主たる対象として、唐話文、日本語文及び序跋の漢文における句読点の使用符号、施す位置、句点と読点の使い分けの表記面から当時の句読法の状況を追究した。その結果、文体ごと句読点の使用に相違が呈されていることが明らかになった。その上、唐話資料における和化の度合いの位相を追究した。

終章では、各章で解明した唐話資料から見る江戸時代における中国語受容の位相差を全体的にまとめた上、本論文の結論及び残されている課題と今後の展望について述べた。

これらの分析によって以下の三点を明らかにした。

(1) 音韻……洒落本『和唐珍解』（登場人物が唐話で会話し、それに音注や日本語訳が付されるもの）中の唐音を分析することで、文学作品における唐音に漢音・呉音の混入があったり、唐音めかした音注が付されること。

(2) 語彙……写本『唐話類纂』と刊本『唐話纂要』の語彙の比較を通じて、両資料に引用被引用の関係があること、および写本『唐話類纂』に俗語や口語が多く見られること。

(3) 句読法……冠山の唐話資料を主たる対象として、唐話文、日本語文及び序跋の漢文における句読点の使用符号、施す位置、句点と読点の使い分けを調査し、和化度によって位相差があること。

これらの検討の結果、江戸時代の中国語受容における、文学作品における唐音表記、写本の口語性、句読法表記の工夫などが明らかとなった。

学位論文審査結果の要旨

論文審査は平成22年1月26日（火曜日）6時より、文学部会議室にて、主査江口泰生、漢字音に造詣の深い辻星児、近代日本語を専門とする京健治、本論文が近世江戸文学にも関係があるので、日本近世文学を専門とする山本秀樹、合計四名で行った。

まず論文の概要、予備審査からの進捗状況、学位申請論文の特徴を申請者から報告してもらった。予備審査で指摘を受けた部分もほぼ解決されている点も確認された。きわめて高い日本語の能力も報告によって確認された。

次に各審査委員から質疑応答がなされた。その結果、以下の点が認められた。

第一に、本論文が徹底的で詳細な調査が実行されており、全体が実証的な態度で貫かれている点である。第一章の唐音分析は漢字一つ一つを頭子音・渉り音・中心母音・韻尾と分類や検討が積み重ねられており、大変な労力であったと想像される。こうした悉皆調査が論文全体を通じて実行されてい

る点、高く評価された。

第二に、従来唐音研究は漢字音研究の一環として行われ、純度が高く、学者の手になる資料を対象としてきた。それに対し、この研究は江戸時代の文芸における唐音の実態を明らかにし、さらにこれまで等閑視されてきた表記（句読法）の面を扱うなど、これまでと全く異なる視点から唐話資料の実態を究明しようとしたところにきわめて重要な独創性があると認められた。第二章で明らかにされた写本や刊本との相違や内容の差などは、資料論としても十分に説得的な結論になっていると評価できる。第三章で明らかにした唐話資料における句読法は、句読法が明治期に西洋文化の伝来とともに行われたという従来の見解に一石を投ずることになる重要な指摘であろうと思われる。こうした着想の独自性は高く評価された。

一方で論文全体を統括するような視点に欠けたり、中古音の枠組みに依拠しすぎるなど、個々の事例に実証的であるがゆえの問題点もあるが、きわめて高い日本語の能力、自分の力で問題点を見つけ出す能力、その問題意識の独創性、きわめて実証的な態度、得られた結論の確かさなど、本論文は博士（文学）の学位論文として十分に評価に値するものであることが確認された。

以上の審査の結果、博士（文学）の学位を認定することについて全員一致で合意した。